



藩校 有終館跡

安政六年（一八五九）、山田方谷に藩政改革の要諦を学ぶため、はるばる越後長岡から備中松山を訪れた河井継之助は、「町人が教諭所で会

います。まず、①人を見てその人に適した指導を行っていることです。閑谷学校の門人たちの問答の記録『師門問弁録』を読むと、門人の個性をよく掴み、その人に適した指導を行っていることがよく分かります。次に、②フェースツーフェースを大事にしていることです。「この塾に集まった塾生は自分に学ぼうとして来ているのだから、一日に一度は是非とも彼らに顔を合わせる

必要がある」と語った、という長瀬塾でのエピソードはそのことをよく物語っています。「山田方谷」の著者伊吹岩五郎（高梁教会の牧師、順正女学校校長）は、その本の中で「先生の教育は心と心の結合であり、人と人との接触である」と語っています。さらには、③実学を重んじていることです。これは技術的なものだけでなく、考え方の基本を学び、種々の課題に対応できる能力を身につけさせることに主眼を置いています。

方谷の教育の力点は、「私心」を取り去り、心を磨く努力をし、滞ることなく自らが考え、行動する人を育てることにありました。『論語』に見られるように、師弟は対話によって教え、教わるものであり、議論・詩作・作文添削の過程は、その対話に他なりません。これは、常に変動する社会と関わり合いながら、力強く生きていくための訓練でもあり、先行き不透明な今の時代、まさにそれが求められているのではないのでしょうか。

終わりに、教育者方谷とは、一言でいえば、「学ぶことに喜びを与えてくれる人」と言えると思います。（文・渡辺道夫）

## 山田方谷に学ぶ

5

### 四、教育者方谷

今回は「教育者方谷」を取り上げ、方谷の教育の特色は何か、そこから私たちは何を学ぶのかを考えてみたいと思います。

方谷は、藩校有終館や家塾牛麓舎（天保九年（二八三八）開塾）での教育に力を注ぐと同時に、藩内の各所（八田部（現・総社市）、鍛冶町・玉島）に庶民教育のための教諭所、野山（現・吉備中央町）に学問所を開くなど、教育重視の政策を進めました。

牛麓舎の規則である塾規には、「職業三條」として「立志（将来の目的を定めて、これを成し遂げようとすること）」「励行（決めたこと、決められたことを実行すること）」「遊芸（教養を高めて文化的に豊かな生活すること）」をあげており、これは終生方谷の教育の基本と言ってもよい

と思います。

方谷の教育の特色をいくつかあげると、まず、①人を見てその人に適した指導を行っていることです。閑谷学校の門人たちの問答の記録『師門問弁録』を読むと、門人の個性をよく掴み、その人に適した指導を行っていることがよく分かります。次に、②フェースツーフェースを大事にしていることです。「この塾に集まった塾生は自分に学ぼうとして来ているのだから、一日に一度は是非とも彼らに顔を合わせる

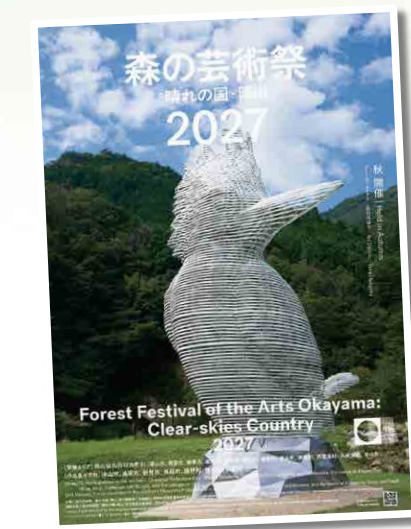


長瀬塾古図  
(方谷の里ふれあいセンター所蔵)

## 森の芸術祭 GO FOR 2027

観光課 ☎21-0217

「森の芸術祭 晴れの国・岡山」2027  
参加アーティストがベンガラ染めを体験！



「森の芸術祭 晴れの国・岡山」2027の開催に向け、本芸術祭として初めて、参加アーティストが会場候補地である地域の歴史・文化を学ぶため、吹屋を訪れました。

今回吹屋を訪問したアーティストは、ブラジル出身のジュリアナ・ドス・サントスさんで、植物の青い色素を使って「時間とともに色が変化する」絵画や空間アートを作るアーティストです。自然の変化をそのまま作品にとり入れ、見る人を包み込むようなアートの世界を届けてくれます。

訪問中は、吹屋の歴史と文化、銅の発掘やベンガラ生産のストーリーを学びながら、実際にベンガラ染めを体験しました。

日本遺産「ジャパンレッド」を象徴するベンガラの赤と歴史的な町並み、そして現代アートによる特別なコラボレーションが生まれることを期待します！

### (株)トヨタレンタリース岡山から車両を無償貸与

市とトヨタレンタリース岡山は、本年5月18日(月)に包括連携協定を締結し、災害対応や観光振興、環境対策など幅広い分野で連携を進めています。

このたび、2027年に開催される「森の芸術祭 晴れの国・岡山」に向けた準備や本芸術祭の広報活動で活用してもらうため、トヨタレンタリース岡山から車両が無償貸与されることになりました。

今後は、この車両を森の芸術祭仕様にラッピングして「走る広告塔」として活用し、市民に広く周知していきます！



### 担当者からのメッセージ

森の芸術祭の開幕までいよいよあと1年、まさに「芸術の秋」を迎えた今、準備が進む中で少しずつ機運が高まっています。関連イベントへの参加などを通して、まずは市民の皆さん自身が秋の深まりとともに芸術祭を身近に感じ、めいっぱい楽しんでみてください。一人ひとりが「自分に何ができるか」を考え、主体的に動き出すことで、高梁の未来を彩るこの大きな舞台を、私たち自慢のおもてなしと行動力で一緒に盛り上げていきましょう！